

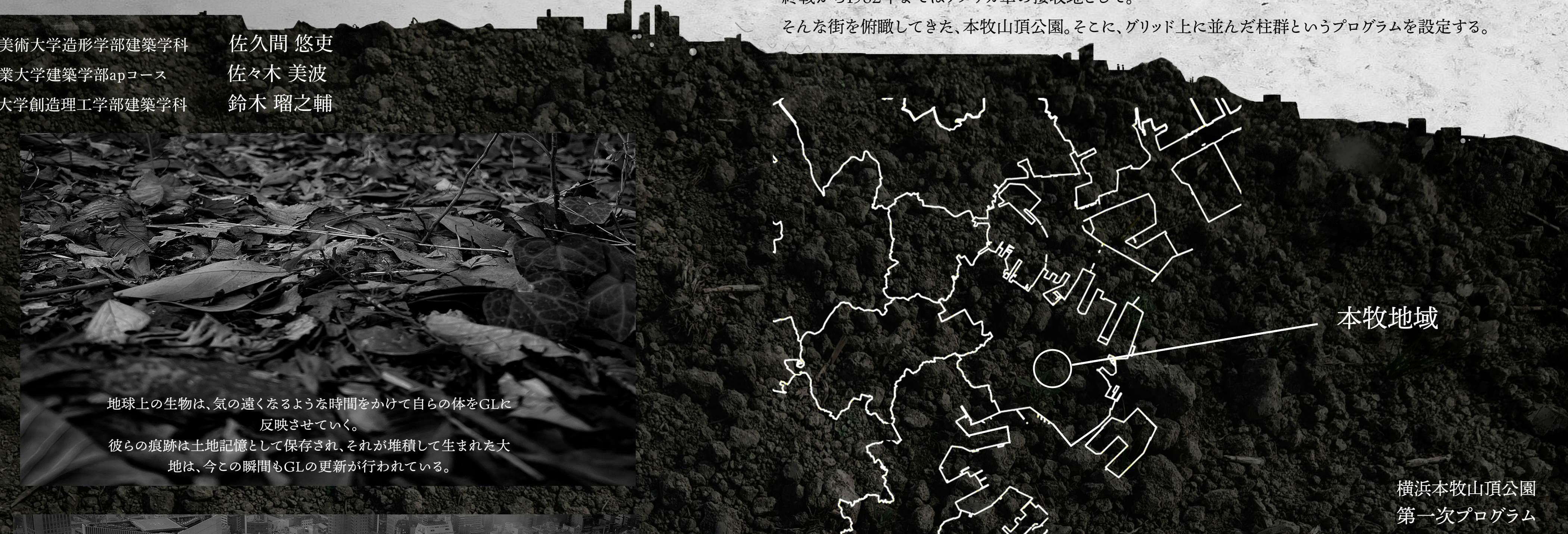
GLの解放、CLの構想

確定要素として与えられたGLを解放し、それに代わる新たな基準、CLを構想する。

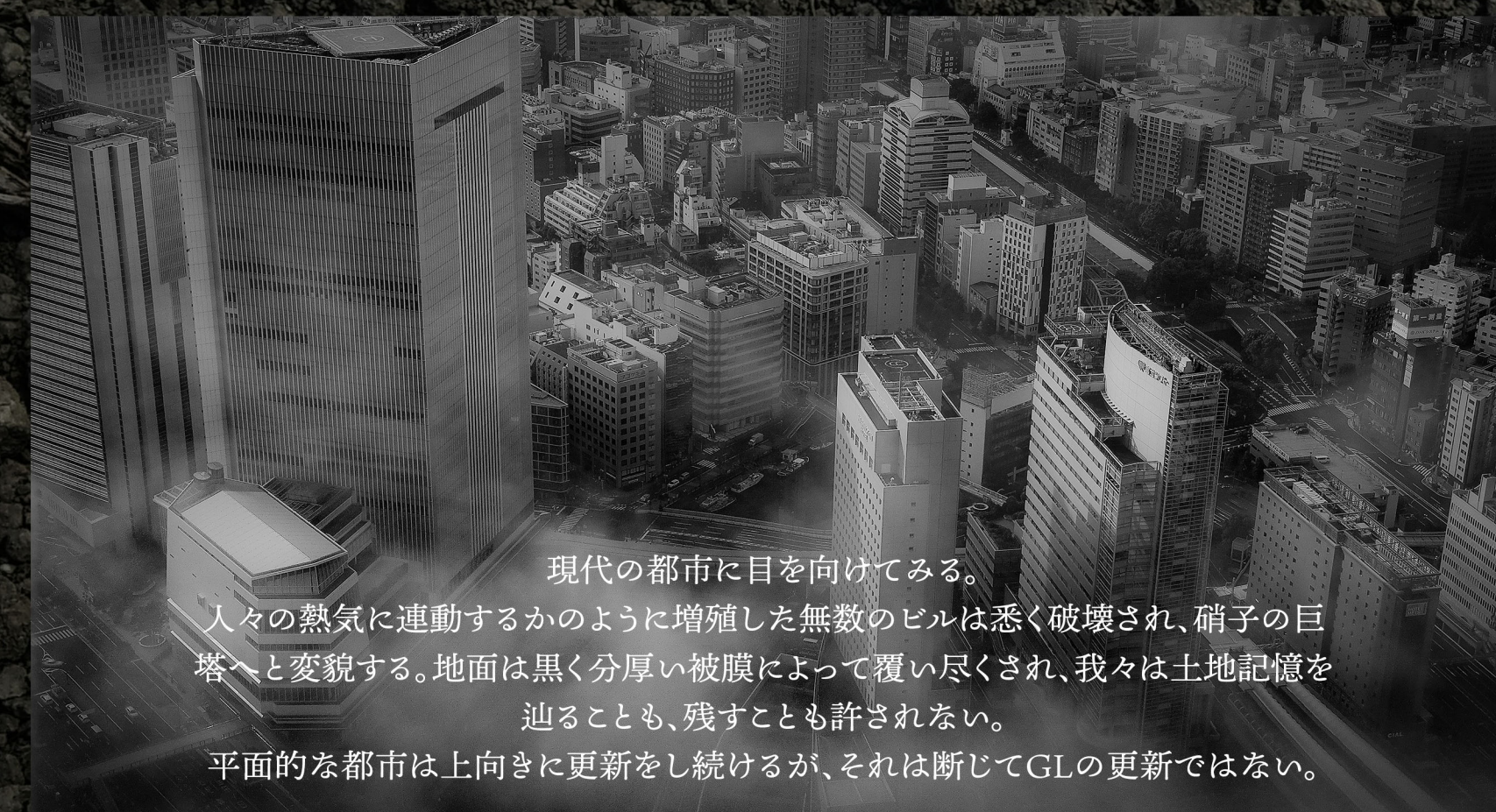
CLは、物質的な基準軸として、或いは時代と共に移り行く人々の営みを俯瞰する軸として、半永久的に存在し続ける。

武蔵野美術大学造形学部建築学科 佐久間 悠吏
 芝浦工業大学建築学部apコース 佐々木 美波
 早稲田大学創造理工学部建築学科 鈴木 瑠之輔

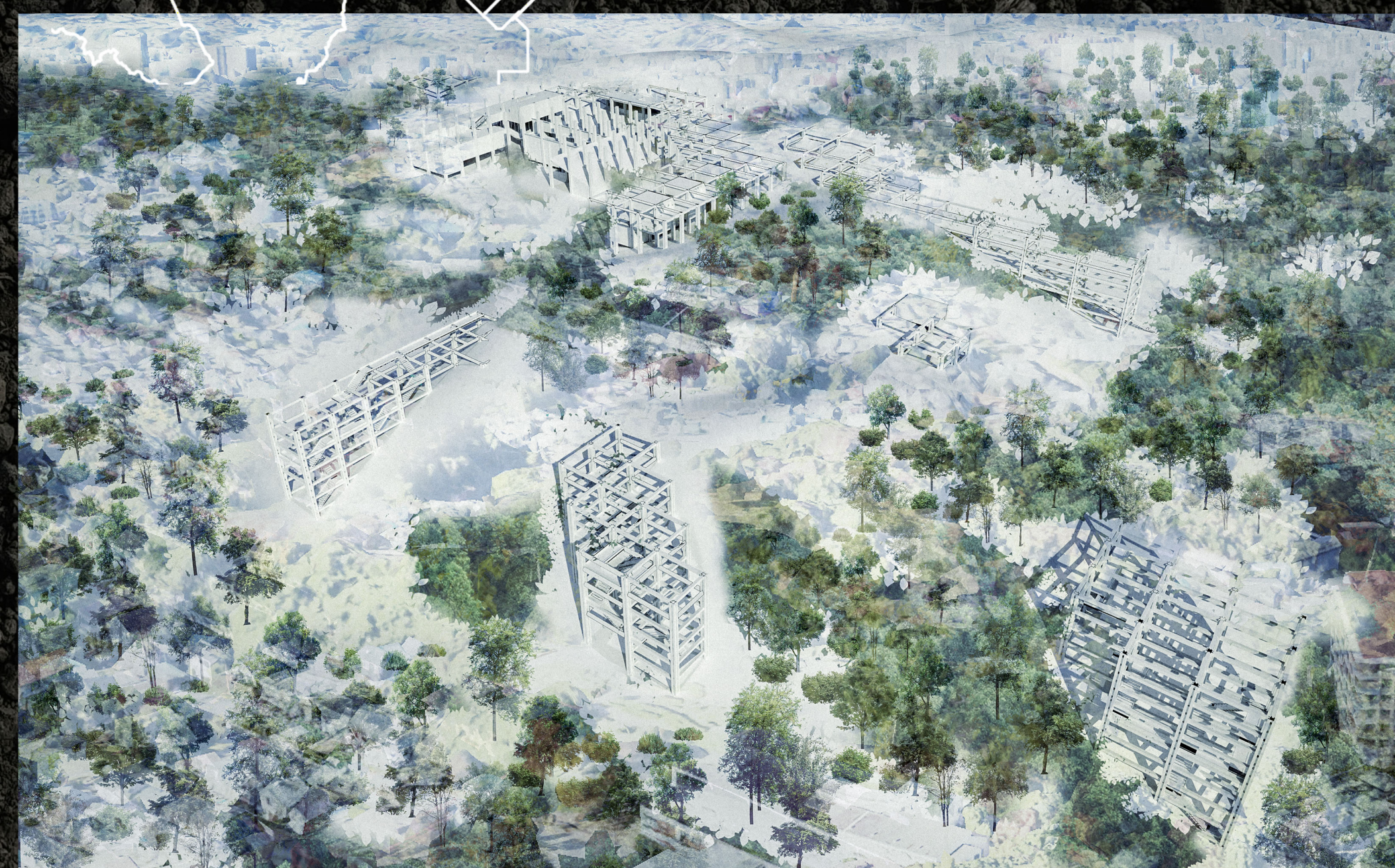
横浜にある本牧地域を敷地として選んだ。この地に残る、人々の記憶を辿る。縄文時代前期の貝塚の残るこの地では、人々が長い歴史を連続と紡いできた。江戸時代には小さな農村として、横浜の開港によって舶来した文化の発信地として。終戦から1982年まではアメリカ軍の接収地として。そんな街を俯瞰してきた、本牧山頂公園。そこに、グリッド上に並んだ柱群というプログラムを設定する。



地球上の生物は、気の遠くなるような時間をかけて自らの体をGLに反映させていく。彼らの痕跡は土地記憶として保存され、それが堆積して生まれた大地は、今この瞬間もGLの更新が行われている。

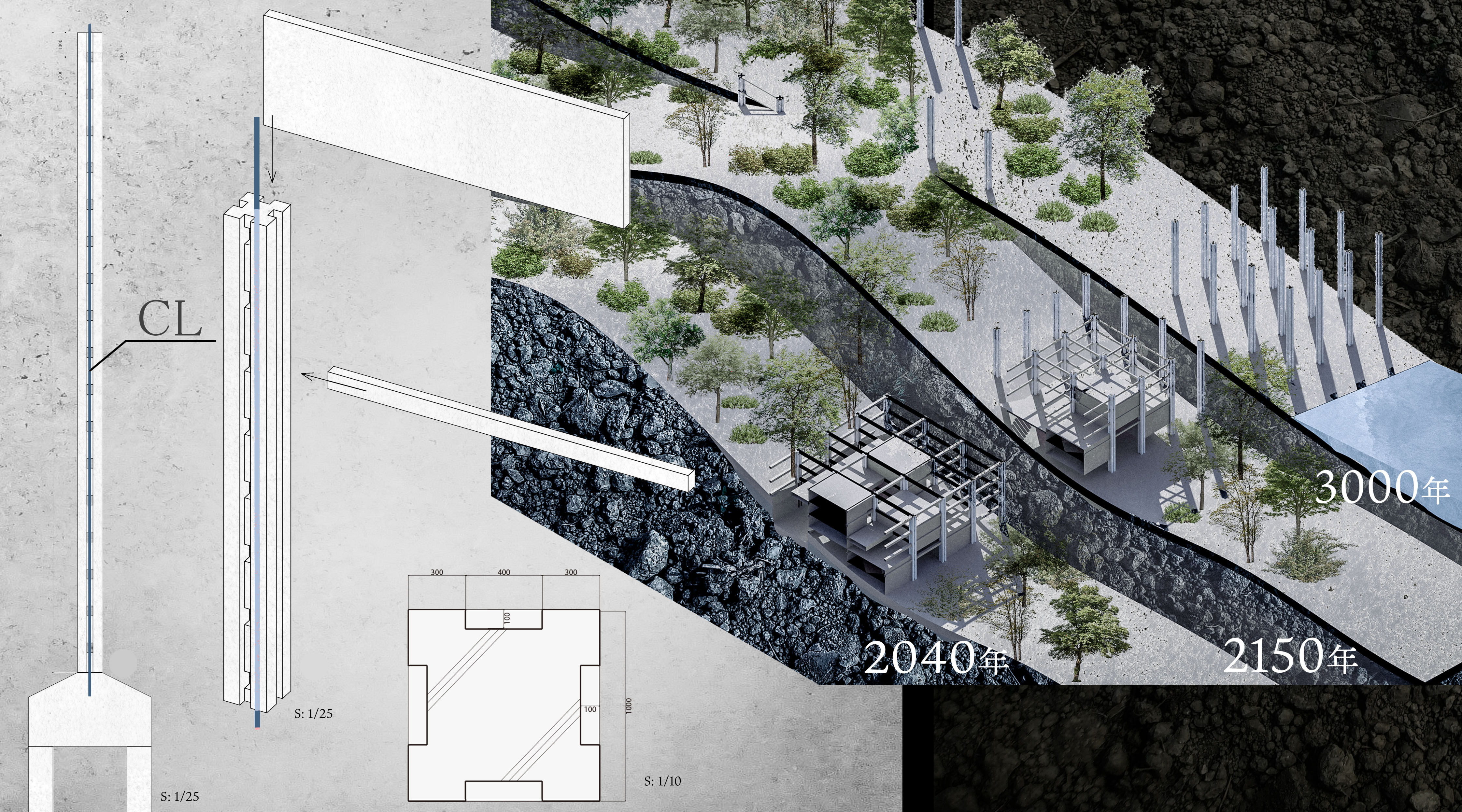


現代の都市に目を向けてみる。人々の熱気に連動するかのように増殖した無数のビルは悉く破壊され、硝子の巨塔へと変貌する。地面は黒く分厚い被膜によって覆い尽くされ、我々は土地記憶を辿ることも、残すことも許されない。平面的な都市は上向きに更新をし続けるが、それは断じてGLの更新ではない。



横浜本牧山頂公園 第一次プログラム

基準という目的を達成するべく、途方もない年月に耐える材料を用いる。それは、炭酸化コンクリートである。中国・西安市郊外にある約5000年前の大地湾遺跡から発掘された古代コンクリートは、炭酸化反応により耐久性を保持していた。これを応用した、コンクリート表面とCO2との反応により作られた、推定寿命1万年という驚異的な耐久性を持つ炭酸化コンクリートが開発されている。

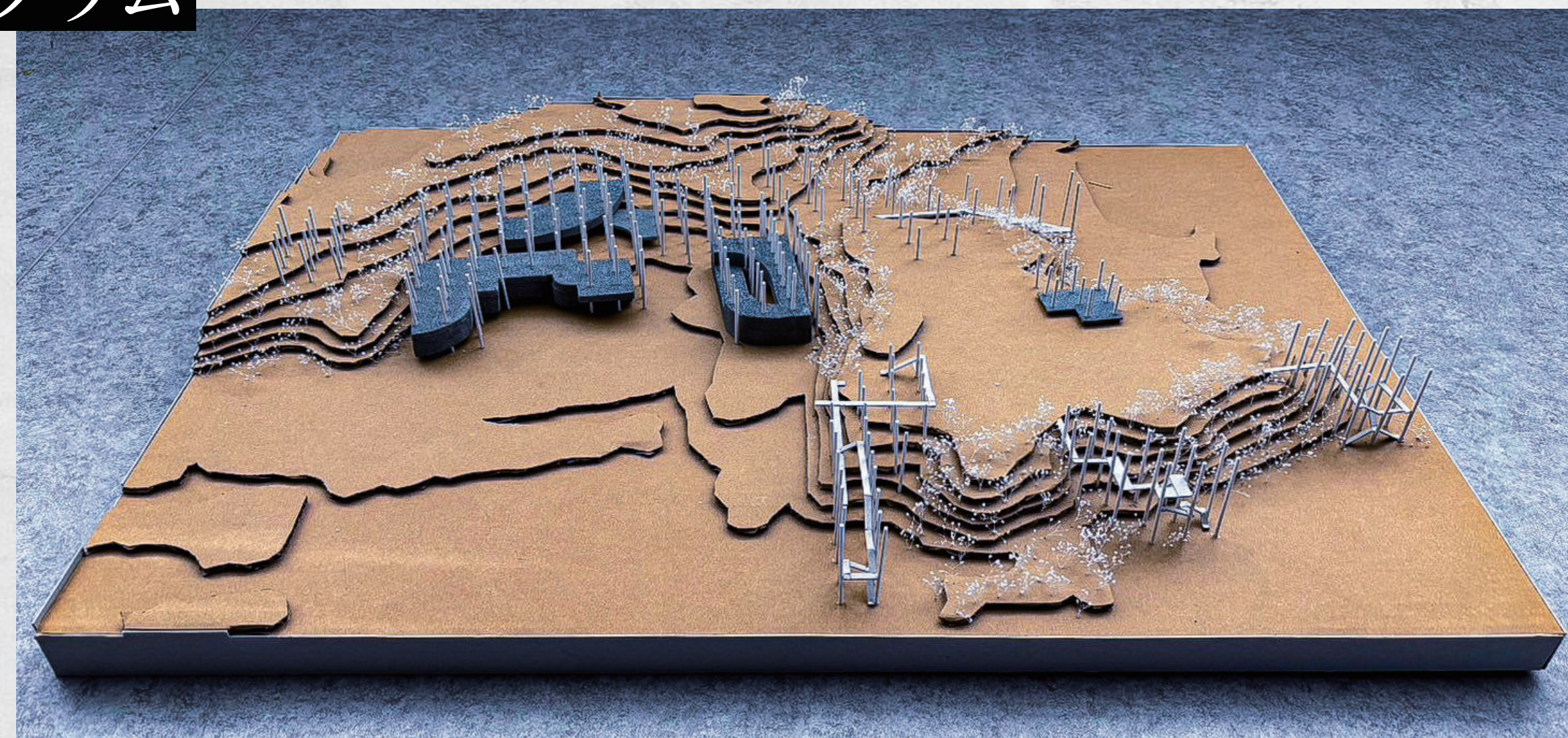


我々は、建築活動によって停止されたGLを再び動き出させるべく、Column Level、すなわちCLを用いた基準の転換を行う。

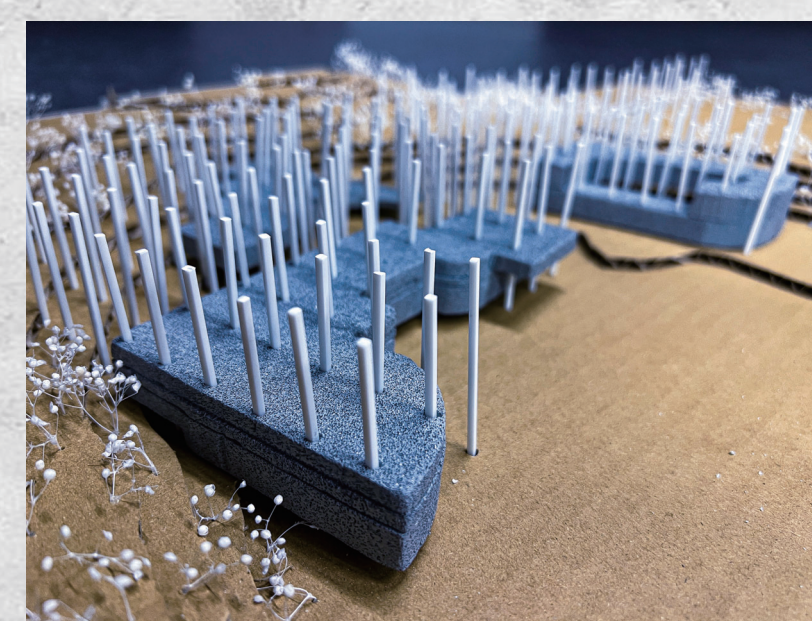
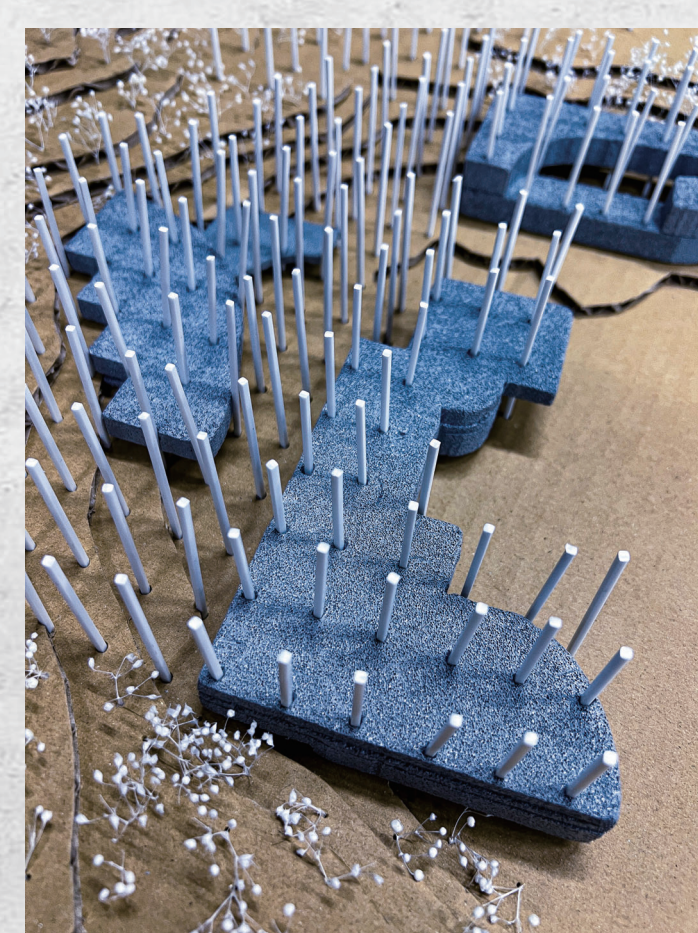
たとえどれほど時間が経とうとも、人間の営みと連動し、その場における建築の基準として成立し続ける。

GLの更新と、暮らしの更新。二者択一と思われていたこれらを融合させるべく、基準転換という手法を用い、新たな建築の在り方を提示する。そして、CLと人間との関わりについて模索し、建築の持続可能性について思考する。

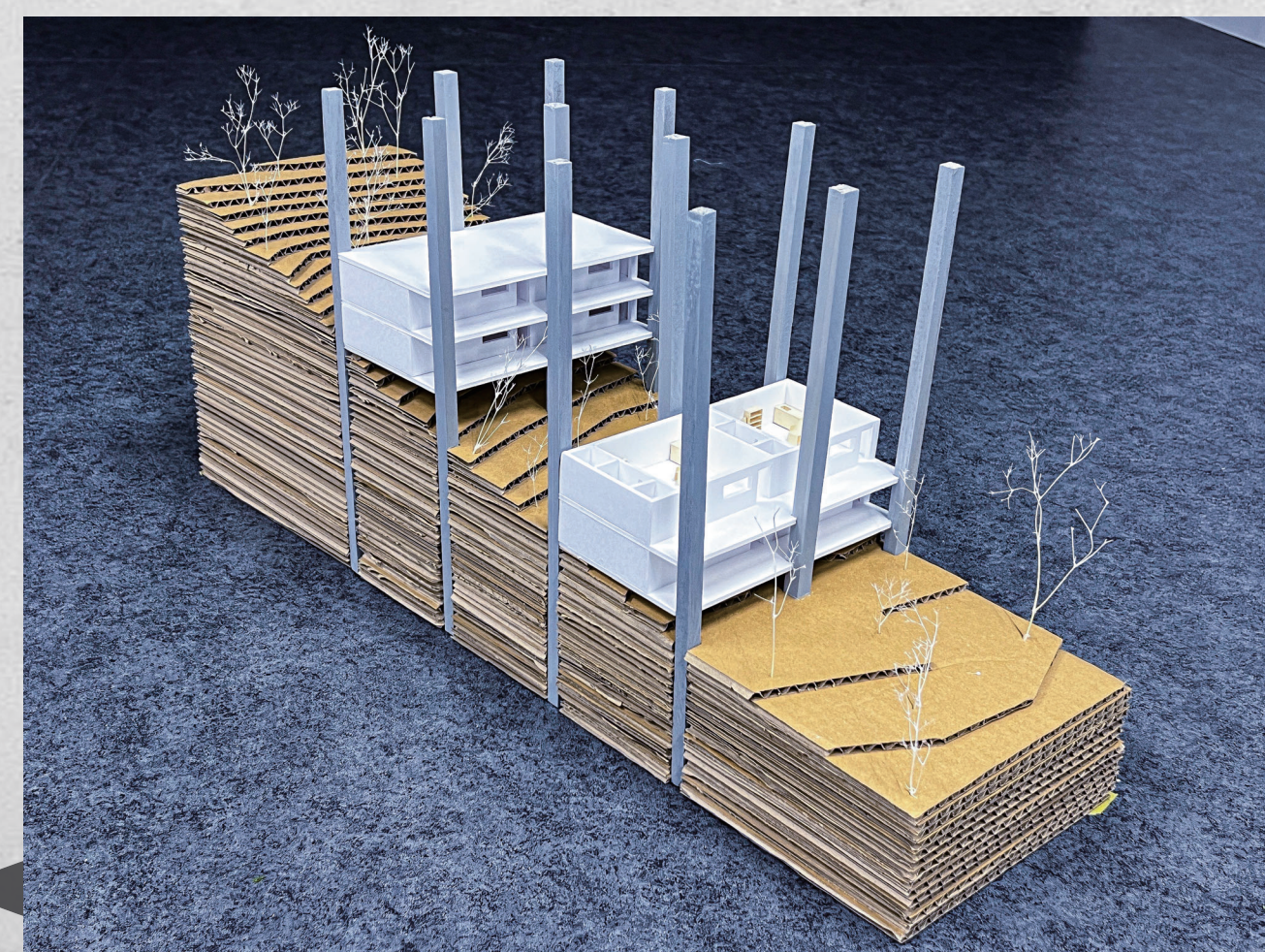
第一次プログラム



階段は本牧山頂公園の散策道として整備される。



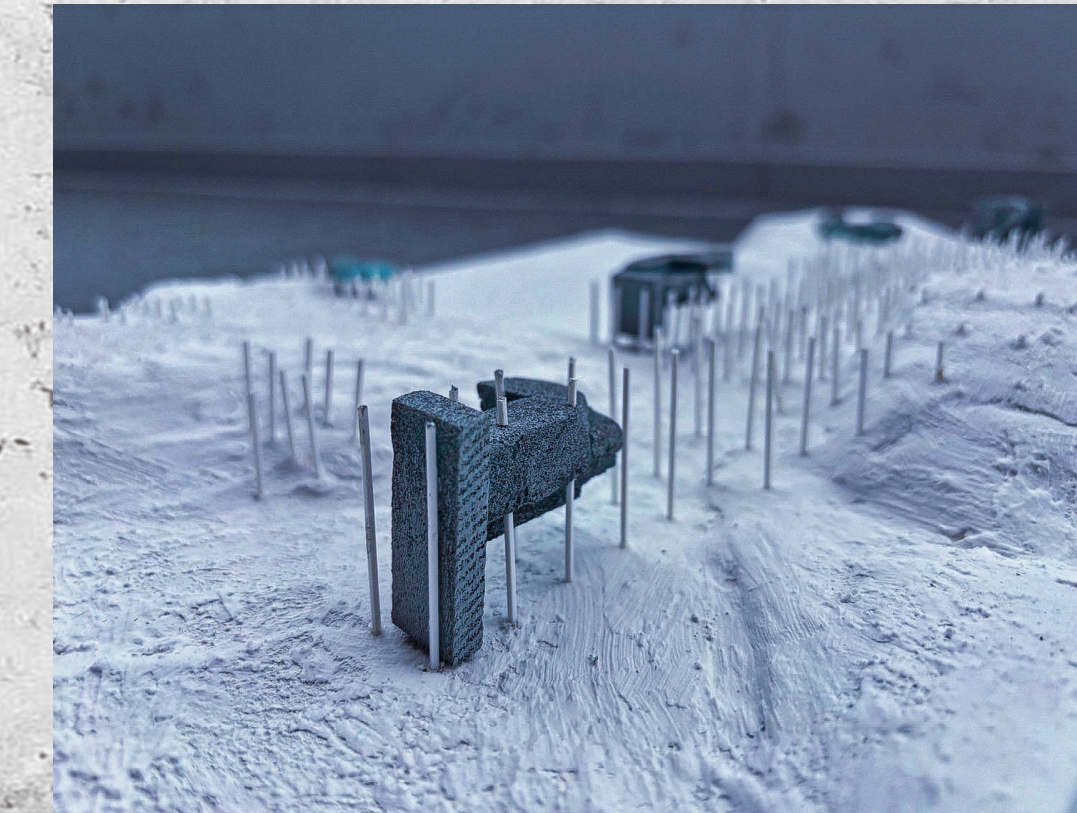
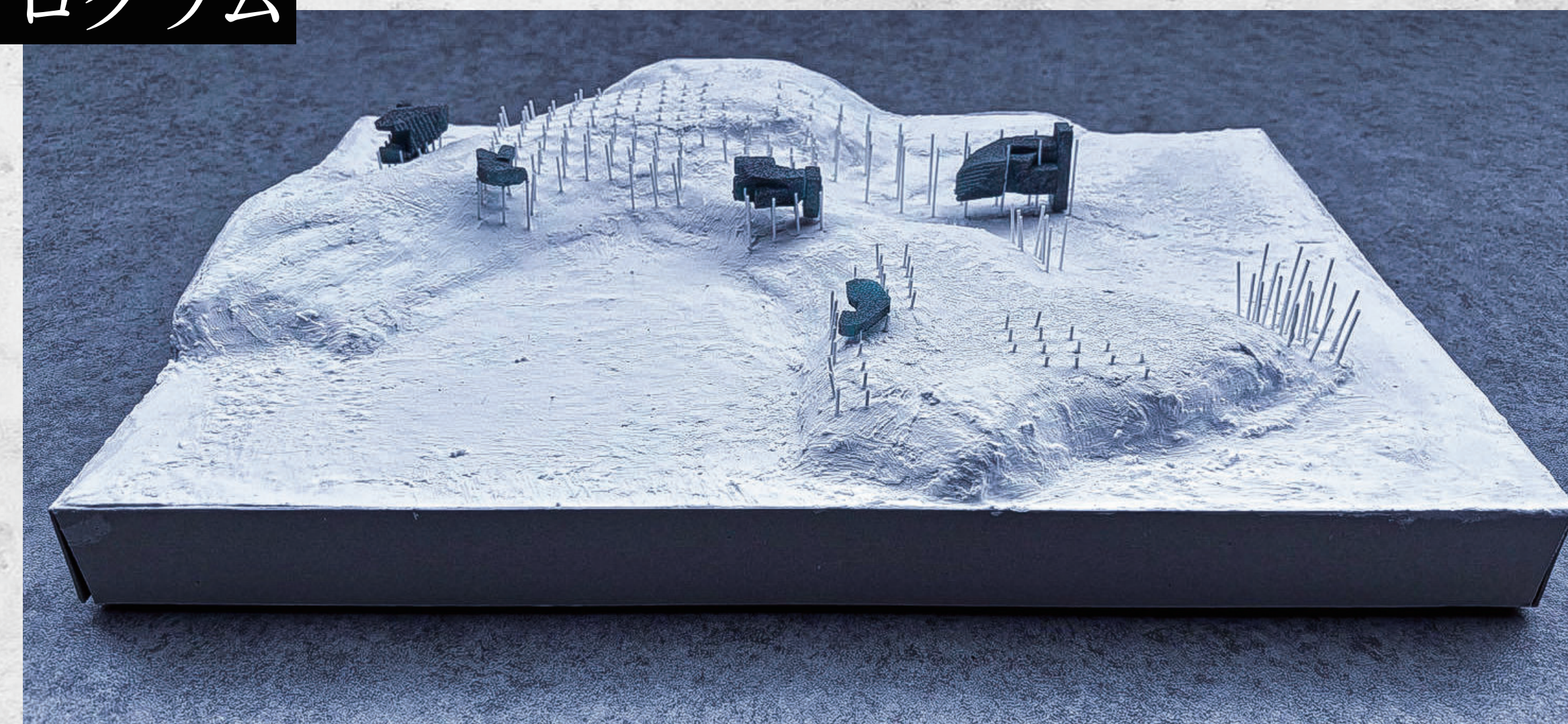
2040年に生きる人々は、この地に小学校とマンションをデザインした。
グリッドを1単位として、住み手の空間が構成されている。



第零次プログラム

人々の設計の触媒となるプログラムを設定する。
街のグリッドを踏襲した列柱を、GLに代わる鉛直方向の新たな基準、Column Levelとして提示する。

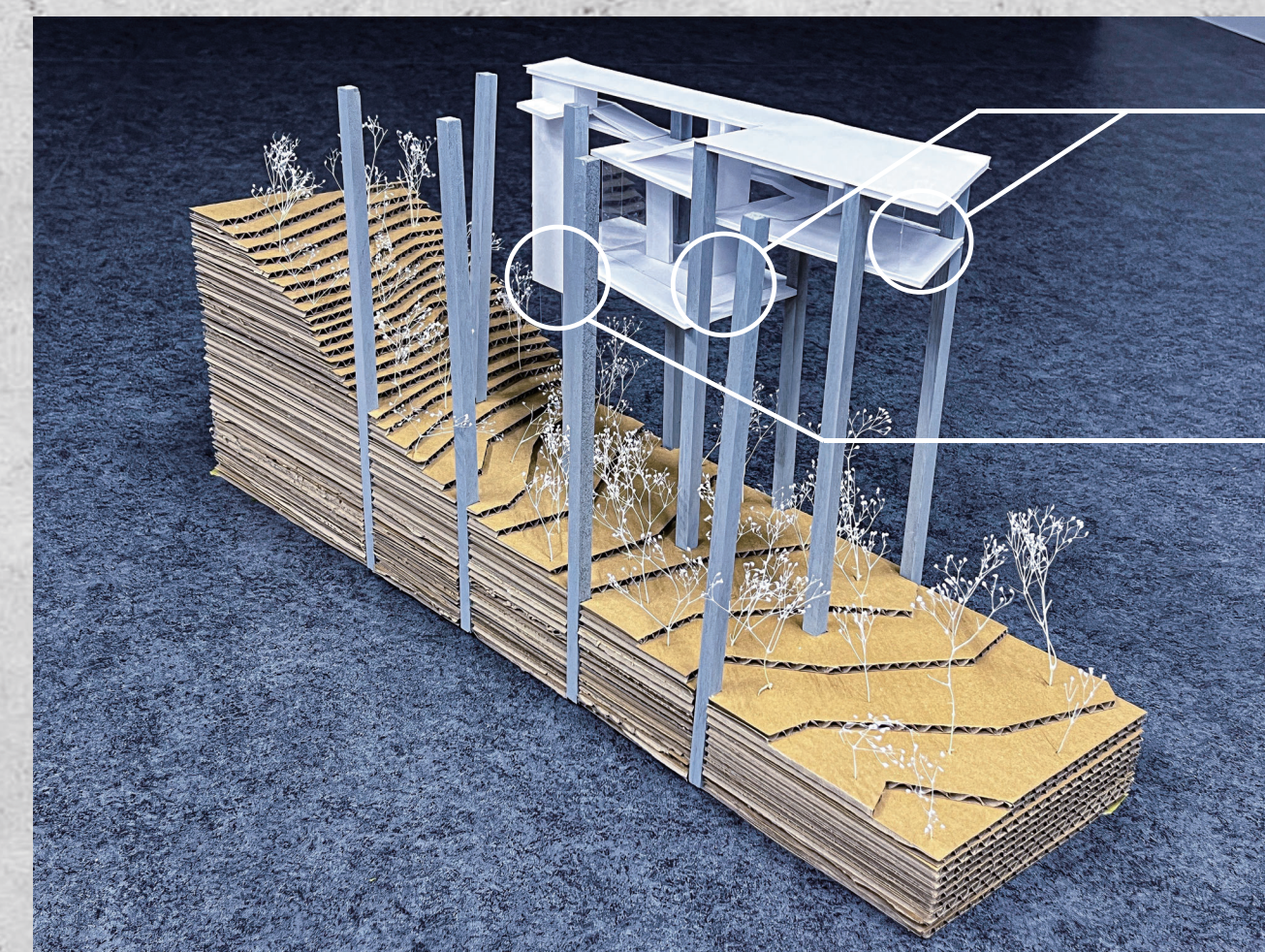
第二次プログラム



施設に至る道路は存在せず、人々は浮遊式のモビリティを用いて足を運ぶ。また、施設内にも浮遊式モビリティを用いられている。
施設内の移動方式には二通り存在する。
自ら意志を持って空間の把握をしながら移動する方式と、スラブに埋め込まれたレールがモビリティに信号を送り、自動的に移動する方式だ。
屋内の導線の移動には後者が用いられているため、スロープを主とした設計とした。
人々の滞留場所では前者が許可されており、人々はクラゲのように、自由に空間を舞うことができる。



本牧小学校の建て替え計画の検討。
既存のプログラムに新たな造形的な可能性が付与された建築。



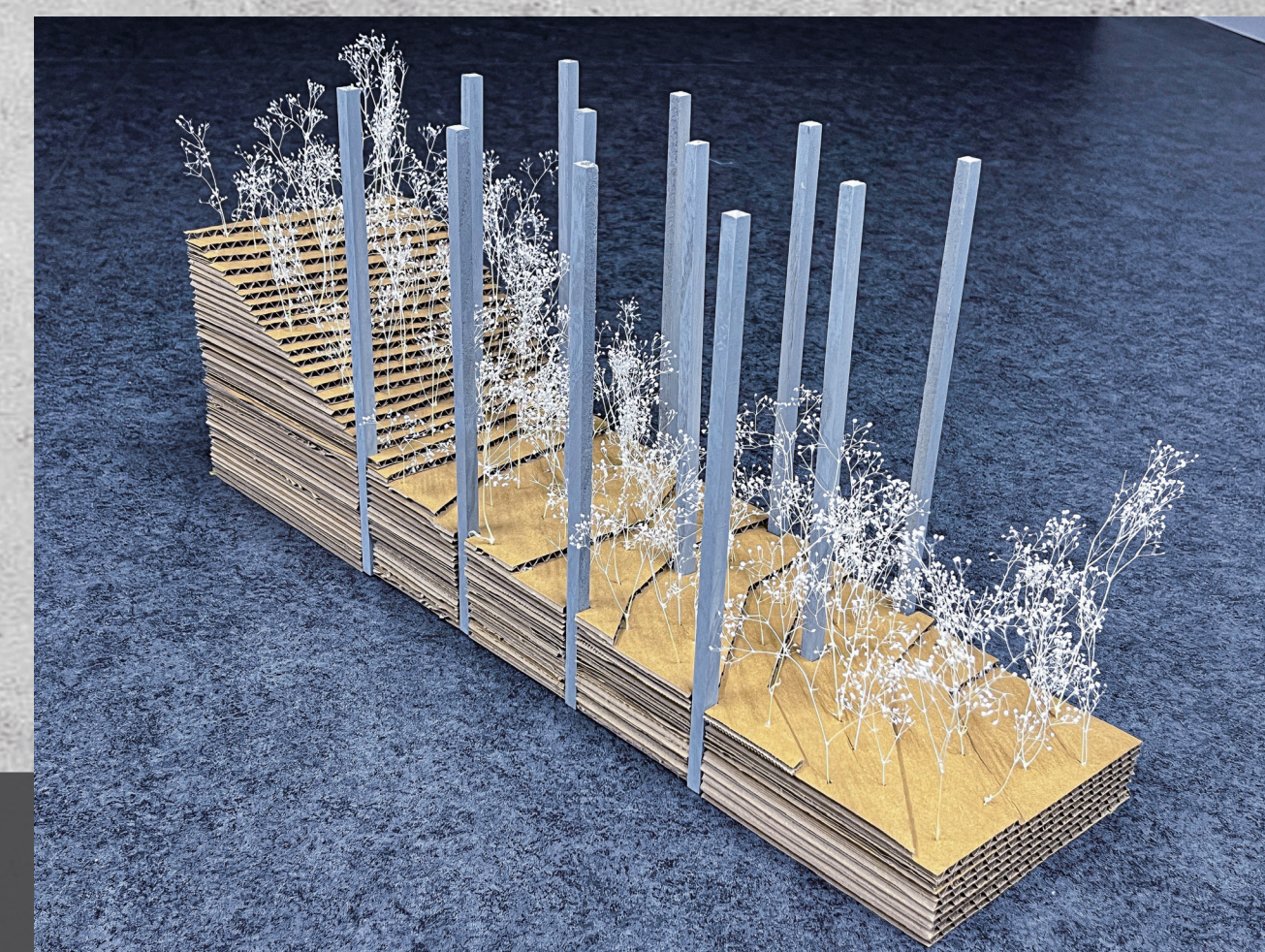
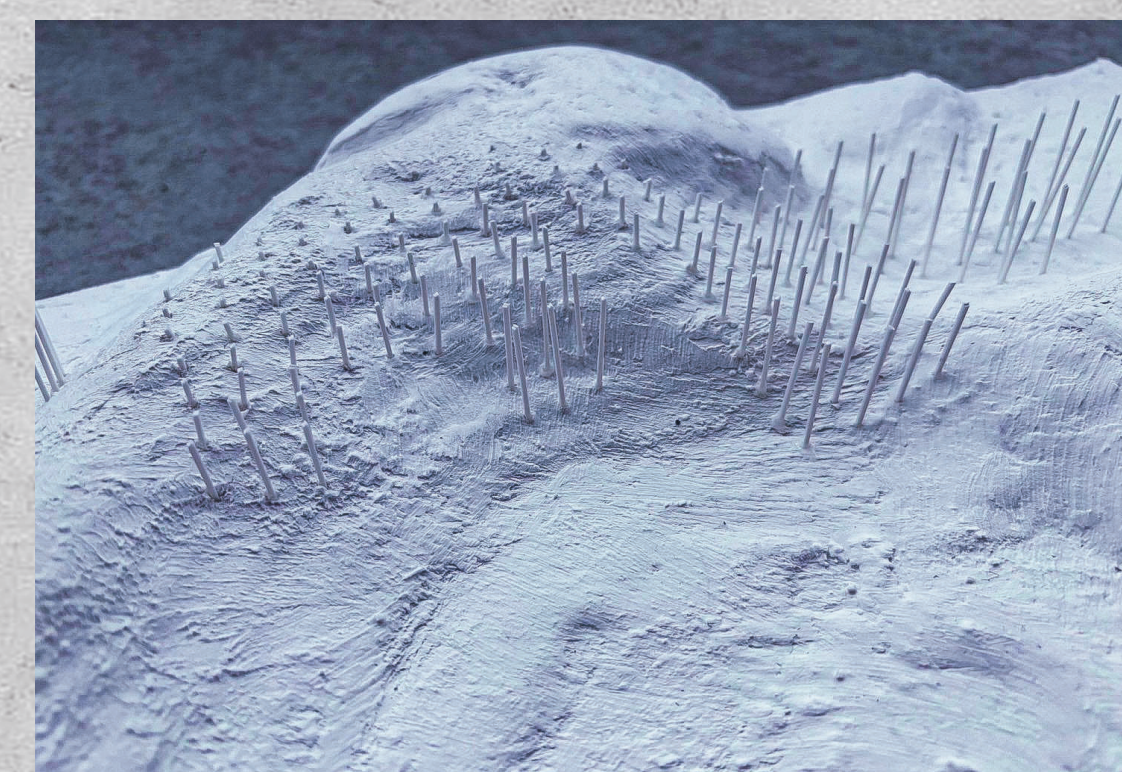
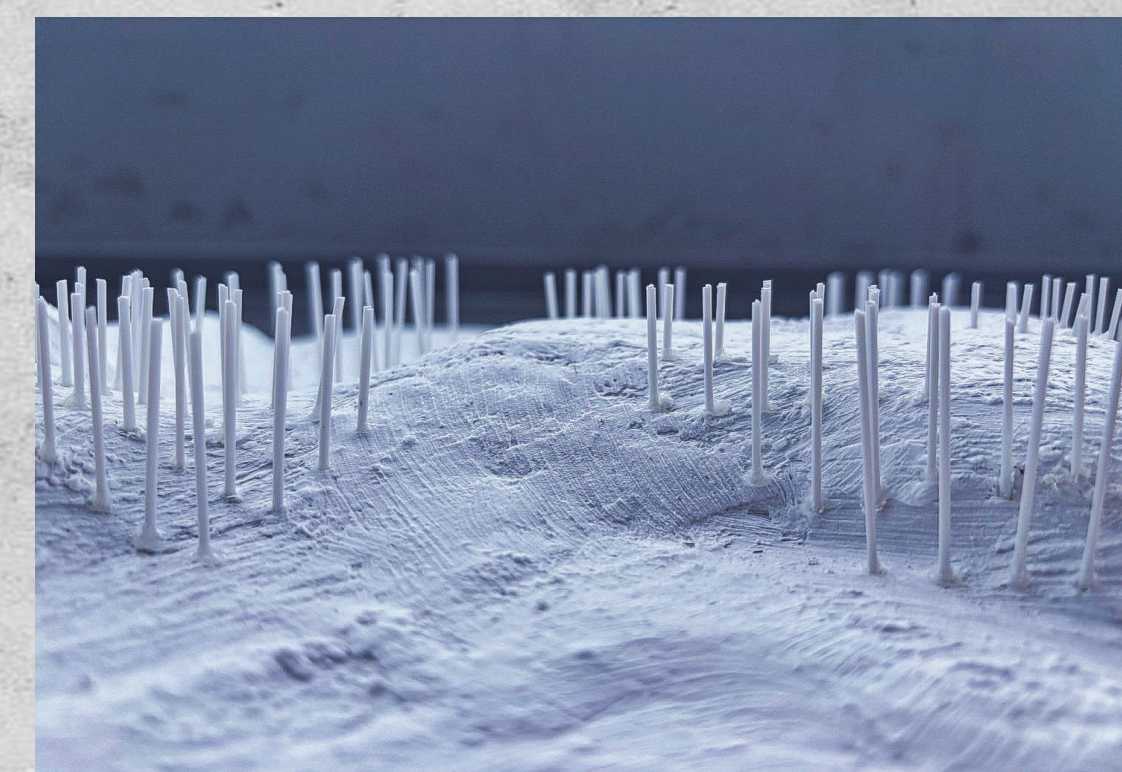
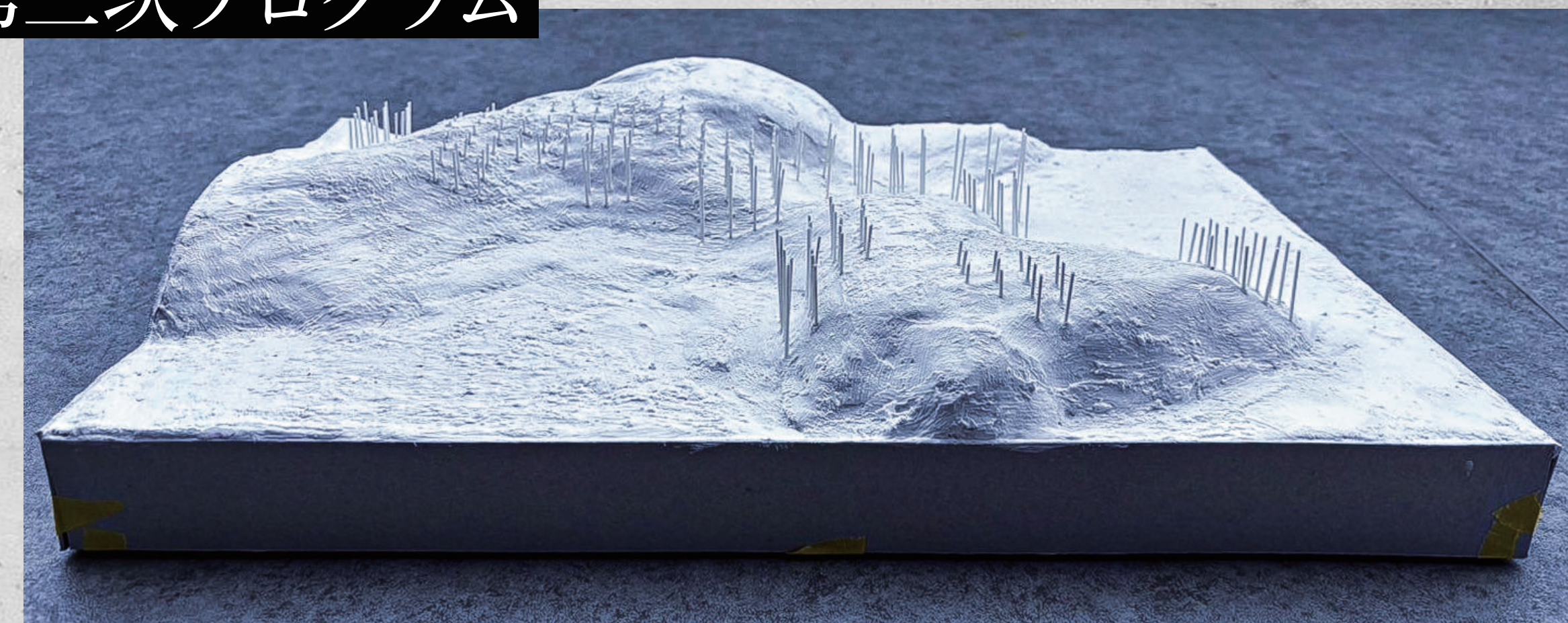
滞留場所

クラゲ化が許可された空間では、天井高が高く設定されている。人々は、思い思いに視点場を探す。

昇降装置

エレベーター的な役割を担う。
下部が解放されており、ここから地上に降り立つ。
モビリティは浮遊したまま地面上に静止。
ここで初めて人はモビリティから離れ、自らの足で大地に触れる。

第三次プログラム



聞き手を失ったCLは、次なる観測者が現れるまでの間、大地に無用の杭として存在することとなる。
地面の沈降、隆起、風化によって、CLはある所では長くなり、またある所では短くなる。
CL自体は、第一次プログラム時と全く同じ姿で存続しているが、聞き手の有無が、二つの時代における意義を全く異なるものとしている。

建築永久化

このフェーズでは、柱は概念的な意味だけを置きざりにして、物質の持つ呪縛から逃れられずに寿命を全うすることとなる。
物質の崩壊と機能の崩壊は同義ではない。
それから数万年、数億年というスパンで、この建築は影響を及ぼし続ける存在だ。

第零次プログラム

我々は、2030年に、CLをデザインする。

これは人間以外の観測者が現れるまでの期間、CLとして成立し、人間に影響を及ぼし続ける、建築生成装置の設計である。そして同時に、個人と建築の対話ではなく、人類と建築との、時代を超越した対話を目的として制作されたオブジェでもある。

第一次プログラム

現代の人々は、2040年に、CLに価値を付与する。

それはCLの持つ独自の基準によって、初めて設計される建築である。

第二次プログラム

未来の人々は、2150年に、CLに価値を付与する。

それはCLが、設計する上での物理的な基準になるだけでなく、大地の持つ可能性を何倍にもする、その時代性が求める意義を受け持つからである。第二次プログラムは、人々が価値を付与している間、成立し続ける。

第三次プログラム

無人となれば、CLは意味づけを行う人の存在しない、対話が成立しない単なる列柱へと化す。列柱は基準としてはおろか、腐敗して自然に回帰することも許されない、文字通りの「オブジェ」として大地に立ち尽くすこととなる。

建築永久化

そうしてオブジェ化した過去の遺物がまた機能性を有するのは、そこにオブザーバーが生まれた場合のみである。

西暦3000年。見る対象として、或いは調査の対象として、列柱は息を吹きかける。

たとえ人間は介在せずとも、CLは示準化石として、すなわち人間の存在した時代基準を提示するべく、彼らに働きかけを永久に行っていくこととなる。柱が倒れ、使われる対象としての任務を終えても尚、CLはGLに溶け込み、基準としての役割を止めることは決してない。

これは新たな建築像の提起であり、建築の新たな可能性の模索のための試みだ。

GLの解放、CLの構想 未来年表

20
30

本牧山頂公園南東部に、街のグリッドを踏襲した列柱がプログラムされる。

20
34

本牧小学校の建て替え計画の検討が始まる。山に聳える列柱を基準として新校舎を設計することが決定する。

本牧山頂公園の観光地化の一環で、頂上付近の列柱を用いて展望台が設計される。公園の階段としての役割を、列柱のデザインによって転換する。

20
40

構想されていた建物が竣工し、列柱の第一次プログラムが完了。

21
00

路面整備、宅地開発による環境破壊への批判と、人口減少による都市機能の集約のために、日本政府が数千万人規模のコロニーの設計を決定する。それに伴い、東京23区以外の東日本における宅地開発を禁止する声明を発表。

浮遊型モビリティによる交通機関が北京、パリ等の都市で整備され、道路が廃止されていく。

21
10

本牧地域から東京への大規模移住によって本牧小学校は閉校する。再び列柱のみが立ち並ぶ光景が広がることとなる。

日本でもモビリティによる交通機関の整備が行われ、ありとあらゆる移動手段の代替としての地位を確立する。それに連動して道路、線路が解体されていく。

アスファルトに覆われていた地面が再び露出し、古来の自然形態への復帰が進む。

21
40

環境保護の観点から、都市部の指定された区画以外における、地面に対する建築物の設置が禁止される。

東京地域からのアクセスの良さ、既存の列柱を用いて、地面に杭を打たずに居住空間をデザインできるという2点の理由に基づき、列柱周辺の開発が認められる。

21
50

本牧地域がジオパークとして認可され、CLによって支えられた高床式のポートが建設される。自分の足で自然散策をすることが新たな娯楽として確立した時代。ポートを拠点として、森の中を散策し、自然地形の斜面を駆け上がる人々。ポート同士を結ぶ未舗装の路面と広場で歩き、遊ぶ。

列柱の第二次プログラムの達成。

25
00

ポートは時代とともに変化しながらも、自然散策の場として使用され続ける。

26
00

人類滅亡。

30
00

ポートは朽ち、自然となる。遺されたCL。

列柱が朽ち果て、示相化石として存在するようになる日まで、第三次プログラムは遂行され続ける。